

火野葦平の〈戦争〉Ⅰ

——中国戦線からフィリピン戦線へ——

——火をもてる蛍灯に来て死ににけり（フィリピン・バターン山中での辞世吟）

石 崎 等

一、はじめに

本稿は、火野葦平の戦争文学の本質を検証しながら、中支から南支への〈戦争〉を経て、フィリピンに対してどれほどグロテスクなかたちでかわったか、という問いの構造を深めることを第一の目的としている。時に行動を共にした中国戦線における大佛次郎やフィリピンにおける上田廣の戦争ものが対比的に引きあいに出される。

何が火野葦平を〈戦争〉に駆り立てたのか。家族、文学仲間や朋友たちとの人間的な交流の親和性や、兵隊作家・従軍作家・戦争作家というイメージを払拭したいがために書かれた諸作品を一方に置いたとき、火野文学における兵隊との一体化と生死超越の戦争哲学ははなはだしく乖離している。個々の陰影のあることばと〈戦争〉を遂行する体制のことばとの間には断絶がある。後者には、〈戦争〉に立ち向かう火野の天真流露ともいえる龐大なことばが編み出されている。そしてそこには、侵略や植民地主義に

対する認識、敵英米へのこわばった人種主義的ともいえる感情が露呈してはくはない。時局に協力したそうしたもの、「戦争」についてのザワザワした文章¹から脱出したい意図をもって書かれた『幻燈部屋』（一九四二・三、改造社）のような長篇世界は、どう折り合いをつけたらよいのか。双方向に放射され、織り重ねられた言葉の複層性を解きほぐす作業しか解決の仕方はないだろう。一筋縄ではいかないが、本稿の第二の目的はその見取図を描いてみることである。

『幻燈部屋』は〈私のライフ・ワーク〉〈私の愛着の深い作品の一つ〉（『火野葦平選集』第三卷「解説」）と称されている。戦前、第一部『幻燈部屋』（一九四〇・一一『改造』）、第二部「神話」（一九四一・九『改造』）、第三部「新市街」（同・一一『改造』）まで約四二〇枚が発表され、ひとまず単行本として改造社から出版された。第一部・第三部にも広東攻略作戦と平定後のことが描かれている。「ザワザワした文章」は極力抑制されているが、火野は登場人物の一人である放埒無慙な久賀友太郎を中国大陸に解き放ち、南支の街を浮浪させた。友太郎は軍属として従軍し生死

の境をかくくぐってきた人物で、阿片密売人を経て軍相手の商売を手広く行い、同胞から毛嫌いされている。いわゆる大陸浪人上がりの典型だ。火野はこのような人物をフィリピンを舞台にした小説で造形しえたのだろうか。

戦線から帰国するたびに郷里へと回帰していった火野は、従軍体験によって発見した広東の魅力を捨てきれず、北九州若松の「歴史と伝説」にまつわる久賀家という家系を創造し、分身としての久賀友太郎を自由に虚構化してみせた。詳細は後述するが、見落とせないのは、巻末に（一月二十日、南方戦場へゆくの日）と書かれていて、第四部以降の執筆が中断されたまま敗戦を迎えたことである。

火野にとって戦前の創作活動は（戦争）と切っても切れない関係にあった。（戦争）とまともに向き合うあまり、フィクションの中での（戦争）は先送りされ、登場人物が（戦争）に翻弄されて物語を自由に動かせない状況が生じてしまう。久賀家の濃密な歴史を担ってきた個人的な登場人物の死はフィクションの終わりを意味する。（ライフ・ワーク）をそこまで持つていくには（戦争）とどのように格闘するかにかかっている。

『幻燈部屋』は戦後、第四部「花扇」、第五部「水祭」、第六部「夜鏡」と書き継がれるが、完成されることはなかった。物語のエンジン役を果たしてきた久賀家の三兄弟は、時局との距離を取りつつも、三者三様に（戦争）に抗うことができずに、そろって米英との戦争に巻き込まれる運命に立ち至る。その意味では、火野の（戦争）は軍国主義の真つただ中で流動し続け終わることがない。（南方戦場）とはフィリピン戦線のことであり、火野は陸

軍報道班員として従軍し、中国戦線とは異質な体験をして多くの戦争文学を残した。『比島民譚集』一冊をとってみても、フィリピンとの関わりは並み大抵のものではない。しかし何よりも注目すべきは、戦後書かれた第六部「夜鏡」の最後（物語の筋からいって、決して不自然ではないのだが）が、次のような一節で終わっていることである。

昭和十六年十二月八日、ラジオは全国民の耳と心をおどろかせた。

「大本営発表、帝国陸海軍八本八日未明、西南太平洋方面ニ於テ米英両国軍ト戦闘状態ニ入レリ」

全日本は、このときから、妖しい興奮の渦のなかにまきこまれた。（『火野葦平選集』第三卷二九九頁）

久賀三兄弟はそれぞれの使命を帯びて戦場に向かうだろう。長兄の友太郎は密命を帯びた役割が暗示されている。フィクションと現実のメビウスの輪のような奇妙なねじれ現象——こうした傾向は（妖しい興奮の渦）が静まる兆候をはっきりと見せ始めた戦争終末期の執筆にかかる長篇「陸軍」（一九四五・八・二〇、朝日新聞社）にも顕著である。「陸軍」が完成しながら広く流通しなかった不幸（あるいは幸運）、『幻燈部屋』が戦中・戦後を跨いで執筆されながら、未完に終わり、しかも敗戦まで書かれないうで太平洋戦争の開戦の時点をもって閉じられている不思議。火野の頭脳は文学と戦場との間を駆けめぐる。戦前と戦後の回路は連続しているようにみえて断ち切られている。その間の四年間に、中

国戦線とは明確に一線が引かれる、フィリピン戦線という火野のもう一つの〈戦争〉があった。そして最大の文学的なテーマは敵アメリカとの対峙とかたちで浮上した。しかしそのアメリカは〈鬼畜米英〉のヴェールがかかっているなかなか真の姿を見せようとはしなかった。火野が対決しようとしていたアメリカはほんやりと歪んでいた。

二、中野重治の問題提起

一九三八年以降敗戦まで、多くの〈戦争もの〉が書かれた。その代表的な戦記あるいは小説が、敗戦後七年を経て『現代日本小説大系』「第五九巻 昭和十年代」として一九五二年四月に河出書房から出版された。火野葦平『麦と兵隊』のほか、丹羽文雄『海戦』、石川達三『生きてゐる兵隊』、上田廣『黄塵』、日比野士朗『呉淞クリーク』五篇が収録されている。どれも代表的な戦争文学である。そこに中野重治が力のこもった「解説」を書いていく。なお、火野と丹羽は共に早稲田大学文学部出身で、後に考察するように文学的な交流があり、火野と上田は〈兵隊作家〉としてのフィリピン戦線で行動を共にした共通性がある。

火野に関しては、田中艸太郎が『火野葦平論』（一九七一・九、五月書房）の冒頭で中野の真意をやや曲解して引いている。田中に限らず火野の熱烈な擁護者は、収録された〈戦争もの〉について概括提示した世界文学的な高みからなされた中野の批評の山脈のもっとも低い鞍部を乗り越えようとしている。戦争「責任」についても、収録作家たちが現役だったこともあって中野の筆は抑

制されているが、かなり厳しいものがあつたことを見落としてはならない。また民主主義陣営の代表的な文学者の立場から、書きづらい点もあつたことだろう。

「海戦」と他の作品とでは、第一戦争の時期のちがいが、第二陸戦と海戦とのちがいが、また中国人にたいするのとアメリカ人またはイギリス人にたいするのとちがいがあつた。しかもすべてを通じていえることは、作家たちが、文学と人間性との忠実であろうとする限り、文学と人間性と両方にたいして一時に袂別するか、文学・人間性とこの非人間的な侵略戦争とを機械的に結びつけるかしか方法がなかつたということ、それが作品として露呈しているということである。別の面からいえば、作家たちは、「あの戦争」とはついに一体になれずにいる。（三二五頁、傍点引用者）

このことは、〈第二陸戦と海戦とのちがいが〉の項目をはずしてみると、火野の場合についていえば、〈兵隊三部作〉と称される『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』や『広東進軍抄』（『海と兵隊』）から『兵隊の地図』『敵将軍』『南方要塞』——この三作は鼎のようなフィリピン戦争物であり、相互に関連性がある——に至った〈ちがいが〉に表れ、上田廣の場合は、『黄塵』から『地熱』『緑の城』に至った〈ちがいが〉に表れるという問いの構造を招きよせる。この中野の問題提起に再帰的視線を向ける必要がある。しかし、中野の関心は『海戦』と『麦と兵隊』などほかの作品との差異などにあつたわけではない。それらひっくり返して批判の対

象となつてゐるのである。煎じつめれば、蒋介石との〈戦争〉からマッカーサーとの〈戦争〉へと推移したことである。後者はフィリピンを舞台にマッカーサーがマニラ撤退から三年半後、反攻に転じ、再びマニラに帰還する、日米の戦局の大転換の意味を文学者がどう受け止めたかにある。火野はそれをまともに引き受けようとした唯一の文学者である。

引用の最後の一文は誤解されやすいが、文意は作家たちが今度の戦争が〈侵略戦争〉であつたことをまったく理解することなく無知のままに作品を書いているということだろう。この点を抜いて中野の批評は成り立たない。火野葦平たちの作品には〈文学・人間性と戦闘目的とは基本的に統一〉とされていなかったという指摘である。これには軍部の意向と検閲があり、執筆の自由などなかったというアポロギーが考えられる。しかし中野の〈問いの構造〉の根幹には、自分をも含めて〈文学と人間性と両方にたいして一時に袂別する〉という生き方が選択肢としてありえたこと——これもまた〈あの戦争〉とはついに一体になれず〉にあつたことにほかならないという意味が含意されている。そういう意味では中野の理論的射程は遠くまで及んでゐるのである。

火野葦平は『麦と兵隊』以来、自分の体験ならびに兵隊に対する敬意と愛情から、戦争そのものに対して冷やかだつた一部の兵隊に憎悪を抱き、人間的に認めようとはしなかった。しかし私は、徴兵制度によつて無理矢理に兵隊となつた人間に対して、すべて同じ規範や倫理を押し付けてみようとする考え方には同調できない。むしろそういう考えに恐怖すら感じる。中野重治は『麦と兵隊』について〈人間らしい心と非人間的な戦争の現状とを、何と

かして調和させたい〉という作者の意図を読み取ろうとした。兵隊の中には、火野とは別の意味で、〈人間らしい心〉を失われない者がいたことを認めるべきである。別の言い方をすれば、中野がいう〈人間らしい心〉を代弁する兵隊がいたことに配慮すべきであつた。戦後、批判的な批評に対して、火野は〈検閲と弾圧〉を理由に書きたいことの十分の一も自由に表現できなかったと弁明している。たぶんそうだろうが、兵隊に寄り添つて戦つた下士官としての立場を考慮しても、作家である火野の想像力の限界は、軍隊ではすべて同じ思想をもつて敵と戦うべきであり、それに非協力的であつた兵隊を冷眼視するという姿勢に強く現れている。これは、危険を自らに課した行動とそこから生まれた文学テクストは、未来に備えたものであつたかどうかという問いを否が応でも招きよせる。

三、火野葦平とヴァイトゲンシュタイン

死の危険を顧みず、あえて戦場に身をさらしたヴァイトゲンシュタインという哲学者がいる。『論理哲学論考』(一九二二)を完成したヴァイトゲンシュタインは苦悩のあまり哲学を捨てた。しかしそれでも克服し得ないその苦悩から逃れるために、第一次世界大戦でオーストリア軍への従軍を志願して、あえて自分の身を死の危険にさらそうとした。彼は捕虜となるが収容所から釈放されて日常生活に復帰し、小学校の教員、修道院の庭師、建築家などの職業を転々とした。その時期は『論理哲学論考』を否定して『哲

学探究』を用意する準備期間に当たっていたのである。ヴァイトゲンシュタインの思索の結晶は戦後出版された『哲学探究』で明らかにされた。

『哲学探究』の中でヴァイトゲンシュタインは「言語ゲームというものは、隅から隅まで規則によって縛られているわけではない。」と述べている。ことばは、日常生活の中の「私」と「他者」との間で行われることばのやり取りによって意味をもつ。しかしそれはすべて規則に縛られているわけではなく、規則と自由の微妙な・ある意味ではダイナミックな関係にある。

しかし軍隊では、兵隊のことばは組織の「規則」によって「自由」は制限される。言語の使用に関してはダイナミックな関係など稀薄である。命令の伝達の復唱、報告、簡単な日常用語、そして軍隊特有の隠語のみによって成り立っている世界である。兵隊が思っていることは抑圧されて沈黙というかたちをとる。作家ならびに報道班員の表現もまた「検閲と弾圧」という「規則」によって思うように伝達することができない。放送・新聞・映画などのメディアも日本の統治にとって都合なもの「検閲と弾圧」という「規則」の対象であった。なにしろ平定後には、火野自身マニラで検閲の仕事に携わり「規則」の管理者であった。後年、火野が表明したアポロギーにはそういう複雑な背景があったことを忘れてはならないだろう。

「どのようにしてわたくしは規則に従うことができるのか。」——もしこれが原因に関する問いでないとしたら、それは、わたくしが規則に従ってかく行動したことこの正当化に関する問い

である。／わたくしが根拠づけの委細をつくしたのであれば、わたくしは確固たる基盤に達しているのであり、わたくしの鋤はそりかえってしまふ。そのときわたくしは「自分はまさにこのように行動するのだ」と言いたくなる。〔哲学探究』二一七
〈藤本隆志訳、大修館書店、二〇〇六（二五刷）〉同書一七〇頁）

これは言語ゲームに関する規則や法則について考察しているだけではない。応用はわれわれの現実の行動の根拠と思索の關係にまで及ぶであろう。ヴァイトゲンシュタインの言語観を裏返してみれば、まさに軍隊組織における言語と行動に通用する。「確固たる基盤」の曖昧さあるいは不透明な言説空間。隘路のようなあまりにも狭い言説空間。「根拠づけの委細」のない行動原理——「敵」を倒すことを使命とする軍隊組織は「規則」への服従が第一義だからである。

ヴァイトゲンシュタインに言わせれば、有意味な言語は事実を言明する言語のみで、有意味性の限界は語りえぬものの領域に属している。そうであるがゆえに、芸術・倫理・道徳・宗教などは正当に扱おうとすること自体が無意味な語りえないものの領域にあるということである。これは芸術その他を貶めているわけではない。

軍隊とは規則尽くめのゆがんだ有意味性の言説が跋扈跳梁する世界である。規律や秩序の背後にある過酷な譴責や理不尽な理由にもとづく殴打の日常性もまたそうした曖昧さを許さない有意味性によって庇護された言語である。ヴァイトゲンシュタインが「二一七」で考察した言語観は戦争体験なくしては考えられないと思

われる。

ヴァイトゲンシュタインの〈戦争〉とは何だったのだろうか。軍隊という特殊な全体主義的な集団組織からかぎりなく遠い、内面の苦悩をかかえた〈個〉の倫理と論理についての徹底的な思索。

そして果てることのない自己対話。そうした苦役ともいえる孤独な実践はやがて他者もまた共有する遺産となるだろう。彼にとつて、ひとしなみに覆う集団の倫理と論理を絶対視する考えなど容認することはできなかった。

四、火野葦平の軍隊体験の輪郭

火野葦平の戦争体験はとびとびだが足かけ八年間に及んでいる。その時期は、応召による兵卒時代と徴用報道班員時代とのふたつに分けられる。大雑把にその経歴をたどれば、前者は、一九三七年九月一〇日、陸軍伍長として応召、杭州湾北沙に敵前上陸、徐州作戦に参加して『麦と兵隊』『土と兵隊』などを書き、一年後の一九三八年一〇月、広東作戦に参加して『海と兵隊』（のち『広東進軍抄』と改題）を、一九三九年二月には海南島作戦に参加して『海南島記』を発表した。同年一月、汕頭作戦に加わった後に現地除隊をし、一二月に帰還している。

後者は、約二年の間において、一九四二年二月、陸軍報道班員として徴用され、石坂洋次郎、尾崎士郎、今日出海、上田廣、三木清、柴田賢次郎、寺下辰夫、澤村勉、向井潤吉らをメンパーとする南方方面派遣軍（フィリピン派遣軍）宣伝中隊の一員としてフィリピン戦線に従軍した。三月、フィリピン・マニラに到着、

バターン作戦に従軍、『兵隊の地図』（一九四二・八、改造社）、（バターン戦話集）と題された『敵将軍』（一九四三・一一、第一書房）『南方要塞』（一九四四・九、小山書店）などを書いた。『兵隊の地図』の扉には（バターン半島総攻撃従軍記）とあり、小隊長の渡辺清二陸軍少尉以下二五人編成による小隊には画家の向井潤吉も加わっていた。装丁・挿絵はともに向井が手がけている。この従軍記は日記スタイルをとり、三月一四日（サンフェルナンド）に始まり四月一日（アリベレス港）に至っている。バターン半島総攻撃従軍には三つの報道部隊が編成され、西海岸部隊の切東隊には『地熱』（一九四二・一〇、文藝春秋社）の上田廣、

中央部隊の大塚隊には『樹海』を書いた柴田賢次郎がいた。各部隊は初期フィリピン戦における三様の戦争を体験し記述したわけである。『兵隊の地図』の「後記」には（四月九日、マニラ陸軍病院にて）と書かれ、内容的には向井潤吉の『南十字星下』（一九四二・一二、陸軍美術協会出版部）と共通するものがあつた。

〈米比軍〉の降伏後はマニラに帰り、ベイヴェュー・ホテルからアンバサダー・アパートに移り、そこを「緑々荘」と命名し、三木清を交えて四人で生活した。向井は戦争画制作のためにただちに日本に帰り、柴田もまたしばらく同居した後、比島派遣軍報道部編纂の『比島戦記』（一九四三・三、文藝春秋社）の出版のためにあわただしく帰国していった。同戦記のバターン半島総攻撃は火野・柴田・上田が執筆し、コレヒドール攻略戦は、のちマニラに残って映画『東洋の凱歌』（一九四二年二月八日の開戦記念日封切）の製作に打ち込んだ澤村勉が執筆している。緑々荘での生活ぶりは火野の『緑々荘』に描かれているが、そこでの三木清

の影はなぜか薄い。報道班員としての三木の存在が気になるが、火野は公的な戦記である『バタアン半島総攻撃・東岸部隊』と『兵隊の地図』以外、緑々荘を拠点として『敵将軍』と『南方要塞』に収録されている多くの作品を書いた。

その後、既述したように『幻燈部屋』に打ち込むと共に、ジャーナリズムの要請に応じて、少女少年向けの『花の命』（一九四二・一〇、實業ノ日本社）や『真珠艦隊』（一九四三・七、朝日新聞社）を刊行し、さらにフィリピン民話の採集と翻訳を手がけ『比島民譚集』（一九四五・二、大成出版株式会社）として世に問うた。

一九四四年四月にはビルマ・インパール作戦に参加し、一九四五年一月、再度フィリピンに渡ろうとしたが中止され、日本の敗戦とともに火野の〈戦争〉は事実上終わった。ただインパール作戦に関しては、GHQによる執筆解除後に渾身の力をこめてその体験をもとに長篇『青春と泥濘』（一九五〇・三、六興出版社）としてまとめている。

五、陸軍報道部と火野葦平

火野葦平は「報道と文学」というエッセイで自分が直面する課題として〈報道を補足する文学的表現〉について考察している。

そして陸軍報道班員としての文章表現と文学者による報道の文学的な表現の違いに言及し、両者を使い分けて考えている。以後、彼は両方の立場から文章を書くことになるが、共通して〈外的な事情〉が働き〈当事者の個性〉や〈感受性の問題〉も反映すると

いう。

報道が効果を除外して考へられないやうに、その報道を補足する文学的表現も、効果を抜きにしては成り立たないであらう。文学にむかつて、直接の効果を要求するのは間違ひであるが、それは単なる功利性を意味するものではなく、なんらの影響もないやうな文学的表現であれば、なきに等しいものであらう。ただ、その本来の文学の性格が、全的に發揮できるといふわけにゆかぬ外的な事情のあることは考慮されなければならぬので、純粹に文学としての論議はしばらく措くが至当かも知れない。（『報道と文学』、『珊瑚礁』一五一頁〜一五二頁、傍点引用者）

文学者による戦争報道の文学的な表現には〈全的に發揮でき〉ない〈外的な事情〉があつた。ひとつは検閲という自分の表現意思にそむく執筆の抑圧であり、もうひとつは表現そのものが〈当事者の個性〉や〈感受性の問題〉が大きな要素となり〈演繹的な分散表現の理解を持つ〉からである。

後者はさて措き、前者の〈検閲〉については、一九五八年一月に刊行された『火野葦平選集』第二巻（東京創元社）「解説」で詳しく語られている。それを要約すれば次ぎのようになる。

- 一、日本軍が負けているところを書いてはならない。
- 二、戦争の暗黒面を書いてはならない。
- 三、戦っている敵は憎々しく、しかもいやらしく書かねばならない。

四、作戰の全貌を書くことを許さない。

五、部隊の編成と部隊名を書かせない。

六、軍人の人間としての表現を許さない。

七、女のことを書かせない。

戦争文学を読み解く基本はここにあり、読み手はそのことに配慮して読解しなければならぬことになる。(戦争)の真実に迫れば迫るほど筆はその批判とならざるをえないパラドックスを孕んでいる。また、作家個々の目に見えない自己検閲も働いたであろう。

こうした執筆の締めつけは作家の自尊心を傷つけたであろうが、(戦争)を書きたいというやむにやまれぬ創作意欲を前にしたとき、ある面妥協して筆の抑制や省筆はしかたのないことだった。戦後、火野は「徐州会戦従軍日記」と銘打たれた『麦と兵隊』の第一稿が現地上海で中支派遣軍參謀長の河辺少将によってチェックされ、さらにそれに加筆訂正したものを『改造』(一九三八・八)に発表したときは、大本營報道部の検閲でさらに二七ヶ所が削除訂正されたことを明かしている。

ところで、引用文中での(効果)とは(兵隊たちがどのような格好をして、どんな顔をして、この偉大な戦果を得たか)(一五頁)ということ伝えることである。それは単なる報道では伝えきれない(文学的表現)といえる。

火野はそれまで『糞尿譚』のような息の長い文章を書いていたが、戦地に行つてから短いセンテンスの簡潔な文章しか書けないと述べている。こうした文体の変化は『麦と兵隊』を書いて初めて気づいたとも述べている。その理由として、戦場では兵隊の肉

体と精神とは厳しい絶体絶命ともいえる運命に支配されており、そうした覚悟から(厳肅な表現)が生まれてくると述べている(一五七頁)。これに加えて兵役についているために寸暇を惜しんで書かねばならないという緊迫感も作用したのであろう。『糞尿譚』から『麦と兵隊』への文体の変化を作家としての成熟と認めるべきか否かの判断は難しい。しかし時代は明らかに『麦と兵隊』の文体を欲し、国民はそれを火野葦平に期待したのである。

一九三八(昭和一三)年五月四日、火野は徐州戦線へ出発し、五月二七日に上海に戻るものの、一六日には(孫圩城で九死に一生を得た経験)をして新聞やラジオで報じられた。徐州戦線従軍中に軍曹進級となった。六月八日、再び上海を発ち、漢口作戦の第一期作戦として安慶攻略戦に従軍を命じられ、南京・蕪湖を経て安慶を占領。一六日に揚子江を下つて上海に戻った。上海には陸軍報道部本部が置かれていて、馬淵逸雄班長が出迎えてくれた。『麦と兵隊』の文体変化についてはもう少し微妙な問題が潜んでいた。それは検閲という(外的な事情)と関係していた。火野は執筆制限の内幕、ペンに加えられていた制限に具体的に言及している。

私が上海に帰つて来ると、憑かれたように、「麦と兵隊」の稿をおこしたのは、魂の奥底から私を駆りたてるものがあつたからだ。どんなに検閲がうるさく、制限がきびしかりうとも、そのギリギリの範囲内でせひとも書いておきたいものがあつたのである。その衝動を分析することはむずかしいが、徐州戦線で見えて来た兵隊の惨苦と犠牲との姿を銃後の人たちに知つても

らいたいことと、私自身が孫圩城で九死に一生を得た経験と、印象の生々しいうちに書きとどめておきたいと考えたこととが、大きな理由であつたかも知れない。「解説」『火野葦平選集』第二卷、四〇八頁)

六月二一日、火野は上海から中山省三郎に長い手紙を書いている。その中で、四月末に（杭州から、軍報道部配属になつて、徐州戦線へ出発するやうになつたといふ通知を出した）こと、五月四日、徐州戦線に参加して淮北の平原を行軍し、一六日に孫圩城で死に損なつたこと、それが終わつて安慶に行つてきたこと、さらに『麦と兵隊』は上海、船の中、安慶城で書き次いで完成したことを報じている。約二二〇枚。何が火野を執筆に駆り立てたのだろうか。文体の変化はそのことと無関係ではない。書簡から引いてみる。

これは徐州会戦従軍日記で、小説ではない。これは、軍報道部員として従軍し、かへつて来ると、軍の意向により、執筆を初めたものだ。（『珊瑚礁』二九一頁）

俺はこの一篇には七転八倒した。五百枚の小説を書く方がはるかに楽だ。これは軍の意向（はつきりした形式ではなかつたが）にもとづいて書いたやうなものだし、どうしても、軍の意向を斟酌しなければならず、と云つて、兵隊にも読んで貰ひたいし、と云つて、えらい人達から、あんなものを書いた、などと、笑はれたくはないし——なしろ、戦争中に戦争のことを書くのが、第一間違ひだ——以上、お察し願ひたし。こんなの

でよかつたら、「改造」にやつてくれ。書いたものも、軍の検閲を受けねばならず、発表の形式も、任せなくてはならない。（中略）『改造』七月号は既に出てゐるし、イソグといふのが意味がわからず（後略）（『珊瑚礁』二九三頁—二九四頁）

火野は友人に本音を吐いている。よくも悪くも、芥川賞作家の火野は戦争遂行の一手段である宣伝報道のために馬淵逸雄によつてその名声と才能を利用されたのである。もちろん火野になかば積極的な承諾があつたことはいふまでもないだろう（戦後しばらくして書いた『火野葦平選集』第二卷「解説」とは若干違つている）。文体改革は（俺はこの一篇には七転八倒した）努力の結晶だつたのだ。

東京で仲介者であつた中山は改造社から芥川賞第一作の原稿の督促を受けていたことを知らせたのである。六月二一日の段階で『改造』七月号を目にしていた火野にしてみれば、なんでそんなに急いでいるのか、というところだつた。そのころの火野の謙虚な文学的冒険は少し別のところにあつた。同じ手紙の中のことを再び引く。

自分は兵卒として戦闘に参加した杭州湾敵前上陸から南京を経て杭州に入場するまでの戦闘記を第一章とし、美しき西湖畔の警備に服した駐留記を第二章とし、徐州会戦従軍記を第三章として書き録し、別々の角度から自分が戦場におかれたこの三部より成るものを総括し、「我が戦記」とでも題し、残したいと思つた。この「麦と兵隊」は、第三章で、或る事情から、最

後の部分が先に発表される事になった。(『珊瑚礁』二九二頁、傍点引用者)

文中の〈或る事情〉とは〈軍の意向〉と同じであろう。火野が従軍中に丹念に日記をつけていることを察知した馬淵逸雄が宣伝のために作品化して公表を促したという線が見えてくる。

この構想は崩れて、第三章が優先されて『麦と兵隊』として発表されたが、三つの角度から戦争の全面を書こうとした第一章と第二章はいったいどうなったのか。このいきさつは『我が戦記』について(中山にデディケートされた評論随筆集『河童昇天』に収録)の文章で明かされている。後に発表された『土と兵隊』『花と兵隊』がそれに相当する。『我が戦記』三部作は若干のフィクションを交えた戦記ルポルタージュとして位置づけることができる。これを一般的には〈兵隊三部作〉と呼ぶが、中支戦線(中支作戦)三部作と称してもよいだろう。

一九三八(昭和一三)年九月二七日、改造社から刊行された『麦と兵隊』が上海の火野の許に届けられたとき、広東攻略戦のために原隊(第一八師団(菊兵团))への復帰命令が下る。しかし元の第七中隊ではなく師団司令部付で、情報参謀野原大尉の指揮下に置かれ、従軍新聞記者係を命じられた。この任務にはとうぜん杭州・徐州作戦に続き、約一年の綿密な計画を立てて実行に移された広東攻略作戦の戦記執筆を期待するものがあつたことはいうまでもない。

火野葦平は一九三七(昭和一二)年九月に結団された第一八師団(菊兵团)に配属された陸軍伍長であり、第一線の中隊の分隊

長だった。応召を受けて師団が結成されたとき、本名・玉井勝則は第二分隊長に任命された。上に小隊長・中隊長がいる軍隊組織の末端である。火野にとつてそれは二三名の部下と堅固不拔の關係で結ばれた(一つの新しい生活)だった。この小さな組織が〈厳かな思惟〉を育んでいた。

火野が従軍した中支方面作戦を時系列的に整理すれば、「杭州湾敵前上陸記」を副題とした『土と兵隊』(一九三八・一一)『文藝春秋』、「杭州警備駐留記」『花と兵隊』(一九三八・一二・三〇)一九三九・六・二四『朝日新聞』夕刊)、「徐州会戦従軍記」『麦と兵隊』(一九三八・八)『改造』となり、その総発行部数は二百数十万部に達したといわれている。発表は火野の従軍と軍報道部との關係で『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』という順になった。『土と兵隊』『麦と兵隊』とも改造社が版權を取得して、中川一政の装幀で出版された。写真・諷刺画・挿絵などが入っているが、『花と兵隊』の挿絵は中村研一が担当している。

「杭州湾敵前上陸記」と副題された『土と兵隊』(一九三八・一一、改造社)は、弟・政雄に対して戦場から発信された七通の〈手紙の蒐録〉というスタイルをとっている。先に発表された『麦と兵隊』などと同様にルポルタージュ色の濃い戦記文学だが、そこには小さな組織のリーダーとして〈戦争〉の哲学的意義——それは死の超克でもあつた——を見出し、それに同化され、鍛錬され、やがて強い使命感を抱くようになるビルドゥングス・ロマン的な要素も含まれている。そうした使命感は書くことによって自己確認され、外部に向けてメッセージとして発信され、戦友の信頼を得ることもあつた。併せて銃後の国民にも向けら

れて。

我々は出征した当初とは全く違つてしまつた。兵隊は見違へるばかり逞しく立派になつた。我々の間には限りない信頼と勇氣が生まれた。嘗て私とその思惟の大いさに駭き、新しい生活の方法を自覚したことは、何ものよりも簡単なことであることが明確になつた。私は私の部下を死の中に投じ得ると云はれた偉大なる関係に對して、その責任の重大さを思ひ、その資格について危惧してゐたけれども、それは何も考へるほどのことではないことが判つた。それは又思想でもなんでもない。私が兵隊と共に死の中に飛び込んでゆく、兵隊に先んじて死を超え、その一つの行為のみが一切を解決することが判つた。私達は弾丸と泥濘の戦場に於て最も単純なるものに依つて、最も堅確に結ばれた。それはも早考へる価値のないほど簡単なものである。それはつまり、そのやうにして我々兵隊は、次第に強く、逞しく、祖国を守る道を進むことが出来ると思つた。最も簡単にして単純なるものが最も高いものへ、直ちに通じてゐる。そのやうにして我々が前進を始め、戦場に現れ、弾丸に殛れる時、自ら、口をついて出るものは、大日本帝国万歳の言葉であると知つた。〔土と兵隊〕一七九頁―一八一頁、傍点引用者⁵⁾

時代はすべての現象がこのようなシンブル・ライフというべき（最も簡単にして単純なるもの）のイデオロギーに統一され染め上げられていく。一度（戦争）が起きてしまつたら、（祖国を守る道）をつきすすみ（大日本帝国万歳の言葉）を叫ぶことが絶対

信条として確認されていったのである。『土と兵隊』の最後近くこの言葉は（杭州湾敵前上陸記）と書かれているがゆえに重い意味を持つている。書簡体スタイルで火野の言説が盛り込まれた『土と兵隊』は単なる戦記文学ではない。戦争の大儀がまだあやふやで、（大日本帝国万歳）が前面に出れば、侵略戦争のイデオロギーとして機能する面を備えている危うさがあった。それをかろうじて防いでいるのが火野の美しい兵隊への信頼と一体感である。

土居健郎は日本の敗戦について文明批評的な観点を踏まえて、軍隊における同性愛的な感情と（甘え）の共同体組織の弊害について鋭く分析した（『甘え』の構造）。軍隊の末端組織において（我々が前進を始め、戦場に現われ、弾丸に殛れる）ことを厭わず、（強く、逞しく、祖国を守る道）を邁進する段階では真実だとしても、その動きを押しとどめる哲学がないからだ。

火野は中国大陸で展開された（戦争）という広状況における戦略・戦術を考える人ではなかつた。兵隊が命を賭けて戦い、奪つた（と火野は表現している）新しい領土の治安と宣撫について思案をめぐらす人であつた。火野は日本人が他民族・異民族から敵意の目で見られることに耐えられなかつた。『土と兵隊』には（聖戦）という言葉はないが、（聖戦）という理想と現実のギャップに目をつぶることは作家として耐えられなかつた。そのギャップを埋めようとしたのが、「兵隊三部作」のうちでは最もイデオロギー色の薄い『花と兵隊』だつたとえるだろう。

広州へ進軍するさなか、火野は熱帯・亜熱帯の風土に接し、独特な感覚で草花や小鳥など囑目する光景を戦記に取り込み、そこ

に〈戦争〉の意義づけを行なおうとした。その才能は見事といえるだろう。兵隊が注意を向けようとしてもしない熱帯の植物描写によって、悲惨な戦争を和らげ相対化しようとしているが、しかしだからといって戦争による住民の悲劇は癒されることはない。

このような経緯をたどって、『我が戦記』として残された一作『花と兵隊』と広東作戦の戦記『海と兵隊』（後『広東進軍抄』と改題）の執筆の環境が整ったのである。

広東攻略作戦に参加したのは、一九三七年九月、火野葦平が従軍した壮年兵中心に結団された〈菊兵团〉と、一九三八年五月、予・後備兵を中心に結団された第百四師団（鳳兵团）であった。⁶

広東作戦は奏功して短期に終り、広東の南支派遣軍報道部勤務を命じられた火野は、『怪談宋公館』の舞台となる広大な建物である宋公館で雑誌『へいたい』の編集、新聞記事の検閲、宣撫活動の仕事に携わりながら軍の意向に沿うかたちで戦記の続篇を書くことになる。

『麦と兵隊』『土と兵隊』によってジャーナリズムの寵児となった兵隊作家・火野葦平を新聞社は放って置かなかつた。火野は〈新聞という怪物に悩まされる〉ことになる。いろいろと人間関係やメディアのしがらみもあり『花と兵隊』と『海と兵隊』が一二月二九日を期して、それぞれ朝日新聞と毎日新聞に同時に連載発表されることになったからである。この仕事はかなりきつかった。文体や内容から見て明らかに、思い出の深い杭州の警備駐留記のかたちをとった『花と兵隊』のほうが優れている。『海と兵隊』は新聞社側が勝手に『広東進軍抄』の表題を変えてしまったもので、内容的には敵前上陸前、台湾基隆とおぼしき港に

長期間にわたり停泊待機させられていたことからの題名変更だった。しかし進軍が早過ぎて火野ら報道班員が追いつけず、後追いの記述も多くて戦記としての体を成していない面がある。しかも記述に反復が多い。明らかに落ち着いて書かれたものでないことが分かる。それでも軍部やジャーナリズムは皇軍の快進撃をいち早く報道したかったのだろう。

火野の〈戦記もの〉のエクリチュールには、他の可能性が存在しうるといふ歴史の〈possibilism〉は稀薄である。日本を相手にした巨大な中国の混沌とした死活の問題に、一兵士・一作家として冷静に対処しえなかつたことはいうまでもないが、〈戦争〉の拡大一途を前にして、火野の理性は萎みがちであり、兵隊体験を活かしうる展望と自由さの柔軟性に欠けていた。しかも〈兵隊三部作〉が二〇〇万部以上の大ベストセラーとなり、社会と国民を動かしてしまう現実の洪水を防ぎようがなかつた。

注

(1) 『解説』（『火野葦平選集』第三卷（一九五八・七、東京創元社）四五七頁。戦前のテキストは、著者により絶版にされている。補筆訂正した改訂版『幻燈部屋』（一九四八・九、六興出版部）ならびに『火野葦平選集』第三卷（一九五八・七、東京創元社）に依拠するが、明らかな改変については適宜参照する。

(2) のち『近代日本文学史考』として旧版中野重治全集第一〇巻に収録。同名の単行本として筑摩書房から出版予定だったが、実現しなかつた。「第二次世界戦におけるわが文学」と改題され、『中野重治全集』第二二巻に収録された。

- (3) 火野葦平「解説」、『火野葦平選集』第二卷（一九五八・一一、東京創元社）四一二頁、四二〇頁。同様に『土と兵隊』の削除訂正は十数か所に及んだという。なお、『麦と兵隊』は一九三八年九月一九日、改造社から単行本として出版された。装幀は中川一政。扉に軍報道部の腕章をつけた火野の写真が掲げられ、巻末には、高橋少佐の「『麦と兵隊』所感」と軍報道部写真真班の梅本左馬次「フォト・ノート」が付されている。
- (4) 火野葦平「解説」、『火野葦平選集』第二卷（同前）四二七頁。
- (5) 引用箇所は『火野葦平選集』第二卷、六五頁～六六頁、新潮文庫版、一〇三頁～一〇四頁。戦後版の多くは現代仮名遣いに改められている。
- (6) 菊兵团がやがてシンガポール攻略、ビルマ戦線に動員されていったのに対して、鳳兵团は内地に還ることなく、広東に八年間駐屯して周辺地域の作戦を行い、敗戦を迎えた。
- (7) 火野葦平「解説」、『火野葦平選集』第二卷（同前）四二九頁。

(いしざき・ひとし 元本学教授)